



1974年京都市生まれ。滋賀大学教育学部を経て、同大学院を修了。大学院時代に、京都ボランティア協会のスタッフとして、きょうとNPOセンターの設立に参画。日本発のNPO立FM局「京都三条ラジオカフェ」の設立の他、障害者などの移動サービスや銀行と連携した融資制度の設立など、地域に根ざした社会の新しい仕組みづくりに取り組む。また、きょうとNPOセンターは2006年より浄土宗「共生・地域文化大賞」の事務局を務める。共著に「京都発NPO最前線」（京都新聞社）、「よくわかるNPO・ボランティア」（ミネルヴァ書房）など。

官主導の自治から 民主体の協治型社会を つくるために

「先生」になりたかった私

大学2回生の時に経験した、阪神・淡路大震災のボランティア活動。その後「京都のNPO三羽鳥」の一人、などと多方面からの期待と注目を集めて20代を送られた深尾さん。NPOが活動する社会の環境をよりよいものにしようとする多彩な取り組みを行ってこられた思いについてお伺いしました。

子どもの頃から教員になりたいという思いがありました。小学校の文集にも、また高校の進路指導調査でも「学校の先生」と書いていました。出身は京都ですが、父の仕事の都合で小・中・高と熊本で育っています。祖父母も住む実家から自転車で10分のところに京都教育大学があるので、定期券で通学することに憧れを持っていましたので、滋賀大学の教育学部を進路として希望し、京都から通うことにしました。

大学入学当初は、今振り返ってみても真面目な学生でした。高校時代はラグビーをしていたものの、大学にはクラブ活動もサークルもなかったの、子どもの頃から憧れていた「キャンプのお兄さん」になろう、と思って野外活動に関わることにしました。また、大学では2回生から学会発表を始めるなど、大学の先生方からは研究者の卵としての期待のホープと言われてきました。が、期待が集まっていたものの、阪神・淡路大震災が私を大きく変えたのでした。ラジオで神戸が大変と聞いて、すぐに大学に行きました。神戸から通学している学生も被災したことを知り、連絡の取れない友人たちを尋ねるために現地に入りました。テレビでも映像を見ていたので、不謹慎ながら、正直怖いもの見たさがなかったわけではありません。しかし、小学校の体育館が霊安室代わりに使われ、死を悼んで泣き崩れる姿を見て、人生で初めて「死」を身近に感じました。それまで「いい学校に行つて安定した生活を送ることが幸せ」などと言われてきたものの、もし社会科学の教員になったら、今ここで経験していることをどう伝えたらいいか、揺さぶられた思いを感じました。

「食べる」場所を共につくる

キャンプの活動も、またその後の震災ボランティア活動

で給料は3万円。そんな中でも、私の役割を見つけて活動に燃えました。しかし、大学院に行っている息子に今度は家族の期待が高まり、「早く就職せい」という視線を常に感じながら、きょうとNPOセンターを仲間と共に作りあげていったんです。

事業を通じて活動を支援する

きょうとNPOセンターの使命はNPOの活動基盤の整備でした。まずは月1回のトークサロンを開催して、現場の声から何をすべきか考えました。運営委員長に就いた立命館大学の中村正先生などと相談して、会員制度を取らないことを決めました。事業を通じて支援しようということにしたのです。そうしてアンテナを張っていくなか、車いすに乗った少年が「バスケしたい」という声がふと気になり、旅客運送法80条に抵触する触法行為でしたが「移動サービス」の事業化と、法制化に取り組んでいくことになりました。

移動サービスの法律を作る、つまり制度を作ることに関わったことで、NPOではできないとされてきたことに挑戦する楽しみと意義を見出しました。その次に取り組んだのがFM放送局を創る、というものでした。動きを始めた2000年当時は郵政省に交渉しても前にはなかなか進みませんでした。構造改革の流れの中、2002年に

も、「京都ボランティア協会」という団体で行っていました。歴史のある団体でしたが、震災ボランティアでの経験や1997年のCOP3（地球温暖化防止会議）の関連イベントに参加して、伝統的な団体も社会が動く中では国際環境、まちづくりなど、活動の幅を福祉から広げていく必要があるのではないか、ということを感じはじめていました。

そのとき、設立当初から京都ボランティア協会に関わり、当時常務理事をされていた玉川雄司さんが賛成してくれたのが追い風になって、後のきょうとNPOセンターを設立するプロジェクトの事務局を担当することになりました。震災で「いのち」の尊さに触れ、また多くの仲間たちに出会い、よそ者がしがらみを感じることもなく動けた実感があつたので、「食べるNPO」を日本でも創ろうということで、仲間と共に必死に智慧をしょうりました。当時大学院1年目の私は研究に身が入っておらず、年間80万の予算、事務局員は私一人



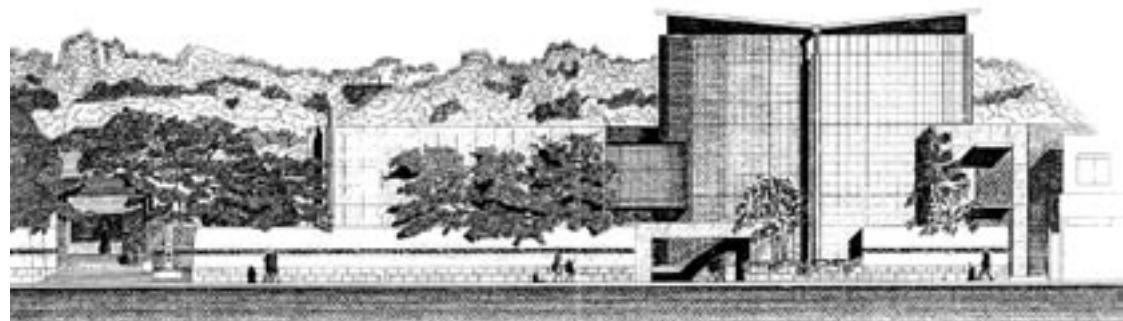
大学院生の頃、事務所にて仲間や協力者と。

日本で初めて、総務省から特定非営利活動法人(NPO法人)に免許が下りることになりました。大阪の放送局長室で「公共放送はこれからはNPOですね、これからの担い手ですね」と言われて、免許を手渡された時には、社会の担い手としてNPOが活躍できることの感慨に浸りました。

「協治」ということばがあります。2000年に「21世紀日本の構想懇談会」の報告書で、「ガバナンス (governance)」の訳語として用いられたことばです。新しい公共性をつくるために、行政が担ってきた仕組みを市民が積極的に担う必要があると強く思っています。FM局の後には、京都労働者福祉協会で近畿ろうきんの二者の協力を得て、新しい融資制度を運用することに成功したのですが、同じ民間という立場で企業と協力することも大切ですが、やはり近代化のなかで社会を担ってきた行政の仕組みとうまい関係を取ることも大切です。

NPOには地域を、社会を、国を、地球をよくする担い手として期待も誤解も高まっています。NPOは行政以上に分野ごとに縦割りになっているとも言えますし、一方で専門を発揮しているとも言えます。今回、浄土宗の法然上人八〇〇年大遠忌事業で「共生・地域文化大賞」の事務局をさせていただくこととなりました。仏教とNPOによる協治の実践に取り組ませていただきます。

(構成：山口洋典／應真院寺町倶楽部事務局長・應真院主幹)



21世紀の都市寺院・應典院は社会に開かれた運営を目指しており、特定宗派の教化や布教にこだわるものではありません。

伝統的な寺院文化を基盤としつつ、
新しい都市のこころの文化の拠点を創造すること。
また、そこに共感する市民が参加、
宗派にこだわることなくオープンな交流を図ること。
その運営の中心を、應典院プロジェクトが担います。

應典院寺町倶楽部は、應典院プロジェクトが推進する、
こころの文化運動のサポーター。
應典院の中で取り組まれるさまざまなソフトを創造し、
分かちあう、
エネルギーの源でもあります。

すばらしい仲間と学びあう。
語り合う。
あなたの夢をぜひ應典院で実現してください。

最初期の「<應典院寺町倶楽部>入会のご案内」より



2007年4月、應典院は再建10周年を迎えます。かつてお寺は劇場であった、という観点から地域社会における演劇の創造空間として「演劇の應典院」とも呼ばれるように取り組みを重ねてくるなかで、もう一つの柱はアートとNPOの共鳴でした。アートもNPOも、それぞれの思いをカタチにするという活動であるがゆえに、共通の接点が見出させるのではないかと…。そうした思いから、両者が出会う場を多様に創造してきたのが應典院の10年です。

また、1997年以来、多くの「場」を発信してきた異貌の寺・應典院での実践を踏まえて、再建9年目には活動の場を築港にある「piaNPO」にも広げることとなりました。築港ARCの愛称が付けられた「アトリソースセンター by Outenin」は、人と情報と活動の交差点となることを狙いに、大阪市・財団法人大阪都市協会の現代芸術創造事業として展開されています。應典院によって連日生み出される、大小数々の「場」が育てる人、地域、社会とはどのようなものか、見つめてみます。

— 10周年という当たり年にあたって —

特集「應典院、リニューアル？」

宗教法人應典院と 應典院寺町倶楽部の協働のかたち

- p.5-9……コモンズフェスタ 2006 イベント大全集
- p.10-13……コモンズフェスタスタッフ座談会
- p.14-15……コモンズフェスタ 2006 に寄せて
- p.16-17……應典院おなじみ劇団紹介
- p.18-22……築港 ARC の展望
- p.23……築港 ARC スタッフ紹介

應典院寺町倶楽部 と宗教法人應典院

○ハードを活かすソフトを創造

前ページに示したとおり、應典院寺町倶楽部は、宗教法人應典院が持つ伽藍（お寺の建物）を活かして、多彩な活動に取り組み民間の非営利団体です。特定非営利活動促進法（1998年）の制定以前より活動していることもあり、法人格は取得していません。組織の形態は、設立当初は理事長を中心とした理事会を通じて会務のあり方を検討してきましたが、2001年度からは会長・運営委員長を中心に運営委員の皆さんからの意見を集約して事業を構想し展開する形態となりました。2005年度以降は会長以外は役職者を置かず、事務局長以下、事務局スタッフ

を中心として事業の企画立案が行われています。そして、應典院寺町倶楽部のスタッフは應典院のスタッフが兼務をし、事業を推進しています。

應典院寺町倶楽部の運営方法が変更される中でも、「独立したNPOである」にはどうしたらいいかが論点となってきました。そのために、2004年度までは、應典院に事務所の賃借料も支払い、應典院寺町倶楽部は應典院に対して完全に独立した組織として事業を展開してきました。しかし2005年度からは、安定的な財務・人的環境を創り出すために発展的な変更がなされることとなりました。見方としては、應典院（ハード）に対する事業（ソフト）部門としての再編となるわけですが、10年間の取り組みを通じて、應典院寺町倶楽部は一貫して應典院と二人三脚で「開かれたお寺」の実現に取り組んでいます。

應典院寺町倶楽部 と大蓮寺グループ

○教導から協働へのモードの変化

應典院寺町倶楽部が事務所を置く應典院は、隣に建つ大蓮寺の塔頭寺院です。大蓮寺は1550年（天文19年）3月5日、時の將軍足利義晴の三男坊・晴誉上人によって、足利家の大坂祈願所として創建された寺院です。当時5千坪とも言われる広大な寺域で催された勸進興行、近世には大規模な寺子屋が置かれ、明治期には高津小学校や旧制の天王寺中学校（現・天王寺高等学校）が発祥するなど、地域の楽しみと学びの拠点となってきた歴史を有しています。その後、1953年には境内に直営のパドマ幼稚園が開園され、お寺が文教の担い手であることの意味、意義に向き合い続けてきています。

應典院は大蓮寺創建450年記念事業として再建されています。再建にあたっての「勸募のお願い」には、「文教と芸能の寺」大蓮寺の伝統と歴史をいかに継承し、新たに現代の都市寺院として生まれ変わる應典院。それは、大蓮寺の21世紀に向けた、もうひとつの顔であり、同時に新しい「都市仏教ルネッサンス」の幕開けを企図しています」とあります。そして今、通常、お寺が人々を「教え導く」という「教導」から、お寺とNPOやアーティスト等が「協力して働く」という「協働」の姿を追求し、実践しています。既に大蓮寺を拠点に活動する「エンディングを考える市民の会」とは、2005年度より緊密な連携を図っているところですが、今年度からは、應典院の2階に事務所を置き、仏教と幼児教育の図書出版を扱う創出版との連携も始まり、書籍のみならずビデオやCD、インターネットなど、多彩なメディアでの情報発信にも、グループ一丸となって取り組んでいきます。

■ シャシンとコラム② ■

大蓮寺・エンディングを考える市民の会（2003～）



(2003.4.17-18 エンディング見本市「世界の寿衣（死装束）」

「エンディングを見つめる社会的な場」づくりをめざし、医療や葬送の分野で活躍するNPOと共に、お寺を核とした支援ネットワークをつくっています。よりよいエンディングを生ききるために、これからの暮らし方、財産や葬送、もしも病気や痴呆になったら……など、誰もが直面するであろう問題に対して、共に悩み、自分らしい選択を通じて解決の糸口を得ていく機会を設けています。毎年、夏のお盆の時期に恒例のセミナーを実施しています。

■ シャシンとコラム① ■

寺子屋トーク（1997～）



(2006.10.1 第46回「看取り文化の新しいデザイン」より)

出会いと気づきと学びと交流の場、寺子屋トーク。記念すべき第1回は、1997年5月22日（火）に「EQのかしこい育て方・教えます」と題し、金香百合さん（大阪YWCA）をお招きして行われました。当初はパドマ幼稚園の保護者のみなさんなど、地域の学びの場にしようと、平日の午前中などに開催していました。そうして続けられてきた場も、今年9月24日に50回記念の場を迎えます。今後とも充実したラインナップにご期待ください。

應典院寺町倶楽部 と会員のみなさま

○サポーターとともにある事業・組織

應典院寺町倶楽部の特徴は、会員制度を取ることによって「開かれたお寺」の支援者となっていたたく方を組織化していること、またそうした人々の思いを形にするために多彩な事業を展開していることです。そもそも設立の背景には、全国津々浦々のお寺が社会に開かれたものとなるように、まずは應典院を手始めに取り組んでいこう、という思いもあったと、1996年の「應典院コンセプトブック」策定の議論際には出ていたようです。

理事や運営委員によって事業を推進していた際には、それぞれの委員の皆様が役割を担っていたっていました。その際、それらの役員を会員から選出

應典院寺町倶楽部 と築港ARC

○新しい公共の実現に向けて

10年間の活動を通じて、特にこの数年の傾向として言えるのは、自治体との協働の場と機会が増えてきたことです。以前より、コモンズフェスタが大阪市の生涯学習フェスティバル協賛事業として位置づけられるなど、自治体とのつながりはありました。しかし、2005年からは「大阪・アート・カレイドスコープ」(大阪府立現代美術センター主催)への参画(企画会議等への参加や、展示場所の提供、協力事業の実施など)、また2006年の財団法人大阪都市協会を通じた「大阪市現代芸術創造事業」の受託をするなど、應典院寺町倶楽部が公の事業を担う主体として活動する機会が増えてきまし

させていただくことによって、民主的、社会的な活動に取り組んできたことも、今日の應典院ならびに應典院寺町倶楽部を導く礎となっていたことは言うまでもありません。今後は、「行く道は来た道に開け」ということばが象徴するように、改めて会員のみなさまの支援に応え、さらなる期待をいただくために貢献すべく、事業推進の担い手であり、組織的な活動への諮問をいただく専門委員を組織化して参ります。應典院寺町倶楽部の事業の分野から鑑みるに、舞台芸術(演劇・映画)、ネットワーク構築(NPO・アーティスト等)、アート&ケア、文化政策、学び、これらの事業に対する実践家や研究者を、会員の中から推挙させていただきます。とりわけ、それらの方々の専門知を発揮いただく機会をコモンズフェスタであると位置づけつつ、年間を通じて充実した事業と、組織としての安定感ある運営に取り組んで参ります。

た。これは、多彩なサポーターによって支援をいただいで活動してきた應典院寺町倶楽部が、公共的な事業を担うに相応しいという評価をいただいたのと同義ではないかと考えています。

2006年12月12日にPiaNPO(大阪市港区)の308号室に設置した「築港ARC(アートルソースセンター by Outelin)」は、應典院寺町倶楽部ならびに應典院が10年をかけて培ってきた発想と人脈をもとに、アート情報を収集、発信、流通させていくことで、新たな芸術文化と人材を育んでいくことを目的にした活動の拠点です。こうして、お寺発の活動はさらなる拡がりを見せてきています。無論、應典院寺町倶楽部は会員のみなさまの支援をいただいで活動する民間の非営利組織です。前述のとおり、会員のみなさまとの協働を通じて、新たな知を協創していきたいと考えておりますので、今後ともご関心、ご支援、ご参画いただきますよう、お願い申し上げます。

■ シャシンとコラム④ ■

コモンズフェスタ (1998 ~)



(2003.11.8 【岩下徹ダンス・ソロ公演】「彼方から」)

表現活動を通じた社会的な問題提起と人材育成の場、コモンズフェスタ。秋から冬への季節が移ろう時期に、アートとNPOとの共鳴による「市民総合芸術文化祭」を行ってきました。2004年度と2005年度は休会しましたが、2006年度に再開。休会した分まで盛り上げようと、通常2週間のところを1ヶ月にわたって企画実施。2007年度は1月の中旬に2週間程度、開催させていただく予定。多彩な表現への、共有・共感の集積の場にご参加を。

■ シャシンとコラム③ ■

いのちと出会う会 (2000 ~)



(例会での議論の様子)

生と死の連続性を見つめる学び合いの場、いのちと出会う会。2000年6月以来、毎月第3木曜日の18時30分から例会を開催(8、12月は休会)。会員であり、世話人を担っていた石黒大圓さんに、医療や看護、ターミナルケア(終末介護)やホスピス(看取り)、悲嘆の癒し(グリーフケア)などの現場に関わる話題提供者をコーディネートいただいています。そうして参加者が相互に「QOL=生きることの質」について分かち合っています。

2007 年度
應典院・應典院寺町倶楽部
事業予定

- 4月1日 應典院 CC9:「南アフリカ花の大地・赤い花は包帯のように咲く」
- 4月14日 築港 ARC「出張 ARC from 築港」
- 4月19日 いのちと出会う会 (68)
- 4月25日 築港 ARC「スタッフオープントーク」
- 4月29日 築港 ARC「漕ぎ出す表現 WS(1)」
- 5月17日 いのちと出会う会 (69)
- 5月21日 應典院『ダンマパダ』を読む (1)
- 6月3日 2007 年度應典院寺町倶楽部会員のついで 應典院 CC10:「あかりの里」
- 6月12日 spaceXdrama2007 オープニングイベント
- 6月21日 いのちと出会う会 (70)
- 6月24日 築港 ARC「漕ぎ出す表現 WS(2)」
- 6月25日 應典院『ダンマパダ』を読む (2)
- 6月27日 築港 ARC「スタッフオープントーク」
- 7月14日 大蓮寺・應典院「エンディングセミナー」(1)
- 7月16日 寺子屋トーク 49「風狂をどう生きるか」
- 7月21日 大蓮寺・應典院「エンディングセミナー」(2)
- 7月23日 應典院『ダンマパダ』を読む (3)
- 7月28日 大蓮寺・應典院「エンディングセミナー」(3)
- 7月29日 築港 ARC「漕ぎ出す表現 WS(3)」
- 8月3日 会員交流会「ビールでお BON」
- 8月4日 芸術創造館 WS フェスティバル「ヨロコボカラダ (白木原一仁さん)」で参加
- 9月10日 應典院『ダンマパダ』を読む (4)
- 9月20日 いのちと出会う会 (71)
- 9月24日 寺子屋トーク 50「個人主義時代のスピリチュアリティ」(仮題)
- 10月8日 應典院 CC11「終わりよければすべてよし」
- 10月18日 いのちと出会う会 (72)
- 10月22日 應典院『ダンマパダ』を読む (5)
- 11月10日 應典院 10 周年記念事業
- 11月11日 應典院「自分感謝祭」
- 11月15日 いのちと出会う会 (73)
- 11月23日 10 周年記念フォーラム (日本アートマネジメント学会主催)
- 11月24日 日本アート マネジメント学会全国大会 第 9 回開催 (大蓮寺・應典院)
- 11月26日 應典院『ダンマパダ』を読む (6)
- 12月17日 應典院『ダンマパダ』を読む (7)
- 12月26日 應典院「自分感謝祭」
- 12月31日 大蓮寺・應典院「除夜の鐘」
- 1月初旬～ コモンズフェスタ 2007
- 1月17日 いのちと出会う会 (74)
- 2月21日 いのちと出会う会 (75)
- 3月8日 寺子屋トーク (51) <予定>

【学び】寺子屋ということばの中に「寺」という名前が見られるように、古くからお寺は学びの拠点でした。その理念を踏まえながら行っている寺子屋トークも、今年 50 回目を迎えます。まさにこのページで用いている 5 つの分野で取り組まれてきました。7 月の 49 回に続き、9 月には 50 回目の記念の回を迎えますが、その後には 10 周年記念事業、さらにはコモンズフェスタと、学びの要素が盛り込まれた事業が多数執り行われます。あわせて、應典院寺町倶楽部主催の舞台芸術祭「space × drama」や、協力事業である夏の高校演劇祭「Highschool Play Festival」など、直接は学びの事業とっていなくても、その場に集う人たちが共に学びあう、そうした事業も多々あります。ひいては、應典院という空間で行われる催しは、すべて学びの事業とも言えるのかもしれませんが。ですので、出会いを大切に、共に学び合う関係が出来上がるよう、よりよい場づくりに取り組んでいきます。

【ケア】とかく、ケアということばは福祉という概念に引きづられがちなところですが、もともとの意味は「注意を払い気をつかうこと」を指します。今年度、70 回目を迎える「いのちと出会う会」、また昨年度から特に関心を向けている「看取り」や「見送り」そして「供養」の問題を考えるセミナーの開催 (大蓮寺・エンディングを考える市民の会との協働) を通じて、お互いの「いのち」に向き合う機会を生み、さらには自らの死生観を育む場づくりに取り組んでいきます。

【まちづくり】應典院寺町倶楽部にとっては、活動そのものがまちづくりの活動とも言えます。昨年度は、大阪市住宅局 (今年度より「都市整備局」に名称) による「マイルド HOPE ゾーン事業」に協力し、上町台地界隈のまちづくり団体のネットワーク「上町台地マイルド HOPE ゾーン協議会」に幹事団体として参加しました。あわせて、「上町台地・終の棲家プロジェクト」として助成金も頂き、10 月 31 日、2 月 18 日の催しに充てさせていただきました。今年度も引き続き、同協議会に関わらせていただきつつ、この間連携をしてきている「上町台地からまちを考える会」とともに、寺町エリアを中心とした、上町台地界隈の魅力を発信していきます。具体的には、11 月 24 日の「日本アートマネジメント学会」翌日のエクスカッション (現場見学会) の企画調整など、多くの人々が地域を学び、楽しむ機会の創造に取り組めます。

【アート】應典院寺町倶楽部が取り組むアートの活動は、医療、福祉、教育、環境、国際交流等、多岐にわたる専門分野を横断して、生活文化に根ざした魅力や問題を明らかにしていく実践です。昨年度は大阪市の「現代芸術創造事業」を受託し、築港 ARC (アトリソースセンター) を設置して、美術や芸術とは一見関係なさそうな実践に、現代的な美術や芸術の価値があると考えられる情報の収集、発信、流通に取り組んできています。また、大阪府立現代美術センターの「大阪・アート・カレイドスコープ」展にも協力し、展示場所の提供と関連企画 (3 月 4 日) を行いました。今年度は、應典院 10 周年記念事業前後と 1 月のコモンズフェスタにて、企画展示を行う予定です。

art

【スピリチュアリティ】「最近、宗教がらみのイベントが多いんちゃう？」というおことばをいただくことがあります。應典院寺町倶楽部は、宗旨・宗派を問わず、人間らしく生きていく上でなくてはならない「いのち」の実践を、NPO やアーティストと協力しながら積極的に進めていく民間の非営利組織です。こうして、教義の普及を目的にしない団体が、歴史と伝統を持つお寺という拠点で活動していく可能性をより追求することは、言語、非言語を問わず、自己と他者とが積極的に向き合う「スピリチュアリティ」への接近とも言えます。應典院ならびに應典院寺町倶楽部の 10 年を振り返る意味でも、今年度は特に「スピリチュアリティ」をキーワードに掲げます。

毎年度、多彩な事業を展開している應典院ならびに應典院寺町倶楽部。昨年度の簡単な総括を行い、今年度の狙いをまとめます。その際、これまで用いてきた「学び・癒し・楽しみ」の 3 つをもう一段階細かく分類して、「学び」、「アート」、「ケア」、「まちづくり」、「スピリチュアリティ」の 5 つに整理してみます。また、今年度の事業予定について時系列にまとめていきますので、ご確認いただきますよう、お願いいたします。

應典院、真夏の演劇の祭典「space × drama2007」を彩る 6 劇団が出揃いました。いずれも結成 5 年以内のフレッシュな顔ぶれ。さて、どのような「祭り」を仕掛けてくれるのでしょうか。ここでは、各劇団の横顔をご紹介します。

LAST HOPE
(ラストホープ)

「お吉物語」

2006 年旗揚げ。空間の創造、空間を使った表現の可能性を探求し、音、明、舞台セットと役者たちによって作られる雰囲気をもとに空間を構築していきます。演じ手には、リアルな感情、リアルなコミュニケーションを目的にしながらかつ誰にでも楽しめる演劇を創っています。



公演期間 7/3 ~ 4

----- ご挨拶 -----

ラストホープのお吉物語は、宝福寺の協力のもと、いままで他の劇団などで上演されたことのない新しい解釈も多々入っております。数多くの文献から、お客様にどうしても伝えたい事。お吉の生涯を通じて、一緒に空間を創造して、何かを感じていただけたら幸いです。

LAST HOPE 代表 岩崎高広

突劇金魚
(トツゲキンギョ)

「愛情マニア」

作・演出のサリ ngROCK を中心に結成。2002 年旗揚げ公演。2004 年ロクソドンタフェスティバル2 で「劇場賞」受賞。2006 年 IST フェスティバルで「IST 賞」受賞。登場人物は明るく病み気味。若者等身大の悩みを、奇妙にカラフルに描くのがウリ。ある人曰く、「ガールズポップ」。ある人曰く、「アングラポップ」。アホでカワイイたまに毒な世界に浸って下さい。



公演期間 7/10 ~ 11

----- ご挨拶 -----

はじめまして、突劇金魚です。構成員は女だけではないのですが、女子の精神のお話を上演しています。結成ギリギリ5 年目で、space × drama に出場させていただき事になりました。今までスローペースでまだ第6 回目公演なのですが、これからガンガン露出していきたいので、このフェスティバルを機に更に勢いづかせていただきます。どうぞよろしくお祈りします。

旧劇団スカイフィッシュ
(キョウゲキダンスカイフィッシュ)

「彼岸」

03 年、活動開始。作風の異なる 2 人の作家 (松山賢史・永田涼) が書く戯曲・小説・詩などを小嶋一郎がコンセプト的に演出し、上演系芸術を企画・制作する組織。主な作品として、07 年 1 月『森谷修治』(精華演劇祭 vol.6 参加公演)、07 年 4 月『春の物忘れは、かなしい』(ウィングフィールド若手劇団応援シリーズ) などがある。



公演期間 7/31 ~ 8/1

----- ご挨拶 -----

現代日本では、テレビ・ネット・ケータイ・ゲーム・アニメ・マンガなど様々な娯楽があふれておりますが、それらの娯楽では満足できない方を対象として、知的な娯楽を提供いたします。興味のある方は、まずは劇団ホームページをご覧ください。

劇想 空飛ぶ猫
(ゲキソウソラトネコ)

「WELCOME TO MY SLAVEHOUSE」

「みんなに、ただ、おもしろかったと言われるよりも、誰か一人の宝物になりたい。」を信念に劇作に励む。安易、軽率、愚昧を嫌い、深遠で鋭利な表現を目指す。人の内奥にある物語、その刹那の瞬間。観客の心を切り刻む刃のような芝居を朽ち果てるまで続けたい。今回で 2 回目の應典院出演。space × drama も 2 回目。そして、公演は 5 回目の公演。



公演期間 8/7 ~ 8

----- ご挨拶 -----

昨年は取り逃した優秀劇団の座。今年は必ずいただきますので、よろしくお祈りします。2004 年に結成して 2 年半。自分たちが何をしたいのか、自分たちが何をやるのか、自分たちは自分たちは自分たちでしかないのに、うごごうごうごめいた 2 年半。答えの一端があるいは應典院の舞台の上にあるかもと、また、うごごうごうごめくのです。

特別招致公演

10 × 10 × 10
(テンテンテン)

「きっかけはサザン」

2004 年に結成されたプロデュース集団 Special R pro. を経て、2006 年劇団として新しく立ち上げる。代表と制作を務める周川まゆみと、リアリズムを得意とする脚本・演出家の十時直子を中心に良質な会話劇を提供している。ドラマチックな展開にはせず、その辺にいる人がただ駄弁るだけというスタイルに定評がある。



公演期間 8/18 ~ 19

----- ご挨拶 -----

初めまして、10 × 10 × 10 の代表・制作の周川まゆみと申します。様々な特色の芝居が上演されている広い演劇界で、私たちはほんの一部にすぎません。しかし、私たちにしか出来ない「旬」の芝居を作っております。それを私たちがらしく出来たら... と思っております。常に前を向いて、日々の成長を目指していきたく思っております。そんな「旬」な舞台を見に、是非、足をお運び下さい。お待ちしております。

協働プロデュース公演

France_pan
(フランスパン)

「貝を棒で」

04 年結成。演劇における恥ずかしい境界を壊しつつ護りつつ、覚束無い言葉のコミュニケーションを軸に、真面目と不真面目の中間地点を探り続ける。揺らいじゃった身体性、現代人の悲喜劇性、ペンペケピーな前衛性。作品はポリリズムに展開。観客の過剰な能動性や批評眼の重要性を各方面に訴えながら、演劇の可能性を弄ぶ。



公演期間 8/23 ~ 26

----- ご挨拶 -----

知ってる人も知らない人も、France_pan の伊藤です。存じ上げても上げなくても、2006 年度の優秀団体 France_pan です。最優秀ではありませんが、優秀団体は一つしかないので、これはまあ最優秀と同じです。腹立っても減っても、とにかく一週間シアトリカル應典院を借りられました。嬉しいです。頑張ります。宇宙と演劇に希望を見る人は来ないで下さい。何かそのへん絶望してる人だけ来て下さい。

「ありがとう」は命の尊厳に感謝する言葉

佐伯典彦

柴田さんとの出会いは、数年前應典院の「いのちと出会う会」の会場で手にした「愛の中へ」という一冊の本からである。帰宅の電車の車中、一気に読み終えた。「この方は、何故、こんなにお年寄りに打算の心がなく接することができるのだろう？」。読み終えた時の正直な感想である。今回、柴田さんが應典院に来られると知り、早々に仕事の指定公休を申請したのは、当然といえば当然である。

柴田さんの講演中、終始笑顔で、ゆったりとした口調で優しく語りかけることができる、その根気強さ、原動力はなんだろう。それは、ご自身が語っているが、自分自身を懸命に追い込むところまで追い込んで、役職にも登りつめ、その時空しさを感ず、自ら命を絶とうとまで考えられた日本マクドナルドでの苦しくかつ貴重な経験からであろう。私も柴田さんには到底及ばないが、専門学

校の教員として10数年勤め、三桁を超える部下をもつ管理職として経験。そして空しさを感じ、その職を投げ捨てた経験をもつので、少しは理解できるつもりである。

私の今の仕事はデイサービスである。迎えて帰りの送迎で利用者宅を訪問すれば、私のようなボランティアでも、そのお年寄りが、自宅で家族とどんなやりとりがあり、どのような位置に置かれ、利用日以外の在宅生活はどのようなものであるか想像はつく。家族からは自宅でもまともな会話や関わりはなく、呆けていくことへの叱責、無視。日中の孤独。老いていく、からだの自由が奪われていく、呆けていくことで迷惑をかけていることへの不安。

早くお迎えが来てくれないかなあ……。そんな利用者にも、いただいた命を最後まで生ききってほしい。利用者の手足にはなれないけど、その代わり

をさせていただけ。無表情な顔が笑顔に変わる瞬間……。柴田さんが言われる「幸齢者」と仕事をさせていただくことで、私がどんなに救われているのか。おそらく、私よりはおそらく短い、明日の命は無いかもしれないであろう利用者にも、まさに一期一会で接していく。

自分自身が、毎朝あたりまえのように目覚め、「今日の命をいただいている」ことに感謝しなければならぬことを教えていただいたのは、まさにお年寄りの利用者の皆様である。そして柴田さんが言うように、人生のうちの99%が不幸であっても、最後の残りの1%が幸せであったのなら、その方の人生は本当に価値あるものになるのではないか。そのお手伝いを微細なりともさせていただける私の仕事に私は感謝している。ある利用者の方から私にいつもこんな言葉が返ってくる。

「ありがとう、ありがとう。ありがたくて嬉し涙がこぼれます。」仕事をしていて、疲れが吹き飛び、ほっとする瞬間。そしていつも私は「ありがとう、ございます。」と打算なく自然に応えている。



(さえき・のりひこ)三重県伊賀市社会福祉法人青山福祉会 デイサービスセンターあおやま「百々」介護福祉士・生活相談員

應典院プロジェクト

建築上で最大の特徴ともいえる「円形本堂」は設計側の発案であった。正確に言えば、設計にあたって、本堂は劇場空間を兼ねること、また大蓮寺の墓地在全体でできるロビーをつくること、その2点だけが秋田から望んだ条件であった。その他の部分は、双方にやりとりを重ねていくなかで出来上がった。まったく新しいコンセプトの寺である。議論は時に紛糾した。「あなたはいつたいこんな寺をつくって何をしようとしているのか」という高口師からの問いかけは印象に深く残っている。

「あなたが死んでも寺は残る。自分の後も、この寺としてやっていけるのか」

「寺の永続性」ともいうのだろうか、設計者の問いかけは、絶えず百年先を見越したものだ。今でこそ、持続可能という概念は広まっているが、この斬新な寺が将来継承され続けていくには何が必要なのか、そのために人材育成や教育が最重要であることも伝えた。

もちろん、そうした問いが投げ掛けられたのは、ただ古建築を再現するのではなく、見たことのないような寺をつくらうとして、それを背負う覚悟があるのかを確認したかったのだろう。

響を与えた。単純に震災時の建物の耐久度という検討もあったが、それ以上にボランティアやNPOは本物だ、ということを実感したことは大きかった。秋田は、実際、被災地に赴き、3ヶ月間にわたって救援活動に携わり、僧侶とNPOが共に一緒に何かをする、つまり「協働」する姿に触れた。かくもこのようにコミュニティは再生されていくのか、と日本国内に目を向け、NGO・NPO活動の可能性を見出した。

新しいお寺を目指す理念は「應典院コンセプトブック」にまとめられた。「寺院文化」ということは、かみ砕いて「気づき・学び・遊び」の拠点と表現した。そうして出

来上がったコンセプトを応援してもらおう、ということ、20名程度の一線の識者に応援を願い出た。「應典院プロジェクト応援団」がそれだが、大学教授、文化人、NPO活動家など多士済々な顔ぶれがそろった。大半が初めての出会いだったが、秋田らの「寺院文化再生」の呼びかけに、誰一人、断りなく、大きな共感の輪が生まれた。このことも、應典院のコンセプトに自信と確信を与えてくれた。

特筆しておかねばならないのは、應典院の再建は本寺・大蓮寺の創建45年記念事業として取り組まれたことだ。当時の大蓮寺の檀家総代にご理解をいただき、総勢773名

秋田には、アジアでのNGO体験、また95年の阪神淡路大震災での救援体験など、社会に参加する仏教の実践のためにも新しい寺院のかたちは不可欠という強い思いが募っていた。

寺院として、新たなハコづくりは、建築家とゼネコンさえあれば出来る。しかし、これまでにはない新しい理念を実現するお寺には、ハード以上にソフトの面が重要だった。当時はまだNPOということばも浸透していない頃、秋田は、僧侶以外の人材を求め、新しいお寺の理念を熟く語りかけた。広告代理店を自営する西島宏さん、企業の研究所で大阪文化を研究していた栗本智代さん、フリーのプランナーとして活躍していた吉崎中さん、この3名と、「都市の迷宮」など著作があり、都市論、都市史を専門とする橋爪伸也さんによつて「應典院プロジェクト」というユニットが出来上がった。議論は、大阪の歴史に脈々と引き継がれてきた「寺院文化」の再創造が必要、ということにまとめられていった。

「気づき・学び・遊び」の拠点として

應典院の再建計画をつくる上で、1995年に起こった阪神・淡路大震災は、應典院プロジェクトの議論にも大きな影

の方々より総額3875万5千円の募財事業にご協賛いただいたことも大きかった。

また、誰よりも支え、引つ張っていただいたくれたのは父として、ではなくベテラン住職としての秋田光茂師であった。通常、お寺は檀家さん以外は出入りできない閉鎖的な体質があるが、早くから幼稚園経営など、「開かれた寺」の先駆を手掛けてきた。この先代住職の生きた姿を鑑として、オウム真理教事件が社会を震撼させる中、これからの宗教のあり方、寺のゆくえ、さらには寺院とNPOの連携を社会に対し問いかけていった。

1997年4月27日、應典院は画期的な現代建築と、革新的な理念を掲げて、運命の落慶法要を迎えた。その日、本尊阿彌陀如来像を前に、新任職の秋田はこのような表白(誓いのことば)を述べている(一部)。

「自らの生き方に、また社会の在り方に、この教えを請う者を等しく受け入れて、支えあい、励ましあい、ともにこの世を仏国土を建設することを願いとして、努力精進することを誓います」

(つづく)

應典院再建前夜。

都市寺院の革新が、始まった

三五〇年の伝統との接続

今年、應典院は再建10年という区切りを迎えた。再建であって創建ではない。應典院は、大蓮寺三世誓誓在慶の時代、1614年に塔頭寺院として創建されており、大蓮寺とともに下寺町に伽藍を構えてきた。塔頭とは山内寺院つまり寺院の中にある寺院のことで、本寺の住職の隠棲所という意味である。現代流に言えばアネックス、別館といった言い方だろうか。

都会のなかで一軒のお寺を成り立たせていくには経済的ちように應典院の復興には、東京から後の住職となる人物、秋田光彦が戻ってきたという物語が重なる。父・秋田光茂師は、当時大蓮寺住職、パドマ幼稚園園長として活発な教化活動に励んでいたが、應典院はまだ戦後の荒廃のままの姿をさらしていた。その長子が、大学進学の後に出版社や映画の会社を経て、生まれ育った地である大阪に10年ぶりに戻り、かつ仏教の世界に帰ってきた。復興から発展へ、そして改革へと、本寺の住職の脳裏には、息子が僧侶としての人生を踏み出す拠点として、應典院のこれからをイメージしていたのかもしれない。

変容する都市宗教を見つめる

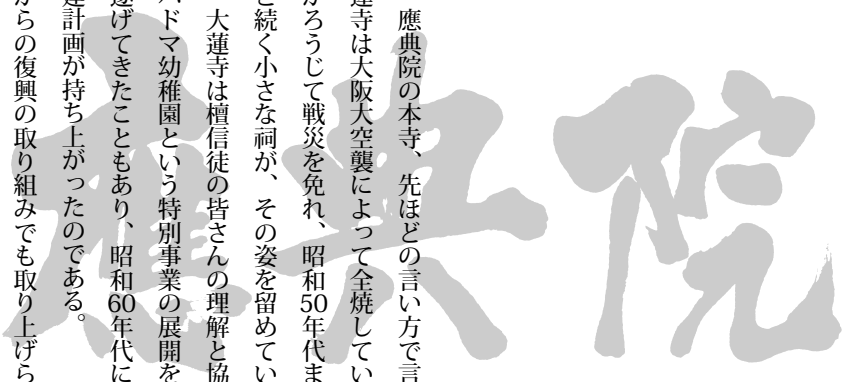
「学び・癒し・楽しみ」のお寺として應典院が再建されていく上では、30代の秋田光彦が日本国外でのNPO活動に専念していたことが遠因となっている。最近注目されていることばで言えば「社会参加仏教」の実践者たる、アジアの開発僧との出会いだ。そこでの気づきを日本国内で展開していくと、教化情報センター21の会、大阪教区浄土宗青年会などで、「OSAKA 寺町ルネッサンス」や「仏教サウンド考現学」

な条件が欠かせない。應典院の本寺、先ほどの言い方で言えば本館である、大蓮寺は大阪大空襲によって全焼していた。一方の應典院はかろうじて戦災を免れ、昭和50年代までは、本堂と4間ほど続く小さな祠が、その姿を留めていた。幸いにして後世、大蓮寺は檀信徒の皆さんの理解と協力を得て、さらにはパドマ幼稚園という特別事業の展開を通じて、復興を成し遂げてきたこともあり、昭和60年代に入って、應典院の再建計画が持ち上がったのである。

阪神・淡路大震災からの復興の取り組みでも取り上げられる点だが、復興には物語とその登場人物が欠かせない。など、斬新な企画を次々実施した。そうして、他宗との連携、他分野の専門家らとの協働を重ね、仏教に新しい光を与えるための創意を凝らしていった。これが後の應典院で展開される価値観や人脈形成の基盤となっていたに違いない。

多様な活動を積み重ねていくなかで、自ずと出てきた問いが、現代の都市寺院とはいかにあるべきか、であった。折しも、秋田は京都新聞に「都市の遊牧民たち」と題した連載コラムを担当する機会を得、1年間にわたって、変容する都市宗教を紹介した。執筆を通して、やはり自らの現場をどう積み上げていくか、その重要性を再確認して、應典院再建の構想をいっそう深めていくことになった。

再建にあたり最も大きな課題が、誰に設計を依頼するか、であった。候補は自ずと絞られ、建築家でもある、一心寺の高口恭行住職（当時）にお願いすることとした。一心寺は大阪はもとより全国的に知られた大寺院であるが、当時から活発な地域活動を展開しており、一九九三年に隣接地の仮設の劇場・一心シアター（青果市場の跡地を買取つたもの）を設置、現代のお寺のあり方を考える上で大きな刺激と着想を得た。依頼には快諾をいただき、いよいよ設計、という運びとなった。



築港 ARC イベントレポート

アート情報の共有と連携のデザイン

開設半年を迎えようとする築港 ARC。関西のアート情報発信拠点として日々、様々なイベントを行っています。トークサロン企画「ARCトークコンプレーション」やメディア企画「関西アート情報ポッドキャスト ARCAudio!!」などのレギュラー企画の紹介も去ることながら、今回は4/14(土)に開催されたシンポジウム企画「出張!ARC from 築港」と子ども対象の自由表現 WS 企画「漕ぎ出す表現ワークショップ“ことば”の海と“そうぞう”の空へ」を特別レポートします!

<http://webarc.jp>

前号から今号までの間、築港 ARC はめくるめくスピード(!?)で幾つかの企画を立ち上げました。

最初に3月から月例トークサロン企画として開始したのが「ARCトークコンプレーション」です。この企画では関西で活動しているアーティストやアートディレクター、またはアートの枠を超えて様々な社会実践を行うゲストを招待し、彼ら彼女らの先進的なプロジェクトを紹介しています。3月は「カフエの領域×異分野から実践するカフエプロジェクト」と題して、カフエコモンズマネージャー/日本スローワーク協会の福井哲也さん、カフエバー・ポコペン店主/劇団子供鉦人主宰の益山貴司さんを招待。二人のカフエオーナーが全く異なる視点を持つて運営していることが浮き彫りになるとともに、両スペースがともにアーティストをはじめとした創造的な社会活動を行う人たちのコミュニティスペースとして機能していることが確認されました。また4月は「家」について考えてみる」という少し特殊なテーマ設定。迎えたゲストは、自宅居間を展覧会場に引越し生活するプロジェクト「出張マイハウス」を行うアーティスト・佐藤武紀さん。様々な人の家を泊まり歩く「居候ライフ」の過程から、友人宅の押入れに出版社を立ち上げてしまったキョートト出版代表・小川恭平さん。本来、最もプライベートな空間である“家”を、空間の面から、またライフスタイルの面から、“パブリック”な空間として他人と共有す

企画ラッシュな築港 ARC

その可能性について議論がなされました。さてさて、そしてこの「ARCトークコンプレーション」と連動する形で始まったメディア(ネットラジオ)企画が「関西アート情報ポッドキャスト ARCAudio!!」です。週4回配信という怒涛(!)のテンションを維持して行っているこの番組。気になるラインナップを簡単に紹介いたします!火曜日は先ほど紹介いたしました「ARCトークコンプレーション」の模様をお届け。水曜日はアートのまつわるボイスコラム、木曜日は SpecialThursday と題して、ミュージシャンや演出家をお招きする特別企画、そして金曜日は関西週末イベント情報をお届けなど!とにかく、関西の濃密なアート情報をおもしろく、わかりやすくお伝えしてまいります。

こんな感じでレギュラー企画を二本立ち上げた築港 ARC ですが、これだけに留まらず、なんと築港 ARC をライブラリーごと出張させてしまいう企画まで行いました!これが4/14(土)に應典院にて開催されたシンポジウム企画「出張!ARC From 築港からアートな情報を伝えること・受けとること」です。そして4/29(日)に、演劇活動をしているスタッフの桔梗谷君が発案した、子ども対象の自由表現 WS 企画「漕ぎ出す表現ワークショップ“ことば”の海と“そうぞう”の空へ」の ver.1 も開催されました!この二つに関しては次頁のレポートをご覧ください。

4/14 アウトリーチ企画、應典院に「出張!ARC」実施

築港 ARC プロジェクトをより広く多くの人に知ってもらうために、應典院内に築港 ARC のライブラリーを一部出張させてプレゼンテーションを行いました。スタッフが各自担当している企画の紹介、及び、情報発信というテーマを中心にライブラリーというリアルなスペースの紹介、およびウェブサイトを中心にメディアでの取り組みについても紹介しました。2部では「個人」から発信するアート情報とその可能性」というテーマ設定で、アートのまつわる情報を独自の方法で発信している識者を招いたシンポジウムを開催しました。主にブログというメディアを用いている、美術家の岩淵拓郎氏、京都橘大学教員の小暮雄雄氏、美術ライターの小吹隆文氏をゲストにお招きし、築港 ARC が情報発信分野において「芸術系 NPO 支援育成事業」を行っているという位置付けを明確にしました。この企画を契機に、今後もしんポジウム形式に縛られずライブや展覧会など様々な形で「出張」企画を設けていきたいです。

【朝田】



應典院 2 階の「気づきのひろば」に、築港 ARC でおなじみの「オル棚」が並びました。築港 ARC は地下鉄中央線「大阪港」駅から徒歩 4 分、火～土の正午から 20 時まで開室。そちらにもぜひ足を運んで下さい。

4/29 「コミュニケーションを磨く」漕ぎ出す表現 WS 開始

劇団での経験を持つスタッフによる子どもを対象にした表現に関する連続ワークショップが始まりました。第1回目となる4月29日には、のべ15名が参加してくれました。まずゲームをし、それから詩の朗読に取り組みました。最初のゲームで子どもがワークショップの空気になじんでくれていて、子ども自身もゲームの中でふざけたりしていらした!また、詩の朗読では、2人ずつのチームに分かれておこなった読み方もありました!「自由に試してね!」と伝えると、みんな積極的に挑戦してくれていました。スタッフに助言を求めている様子もありました。完成した作品の中には講師自身が思いもしない読み方もあったくらいで見ている子どもたちの中からは「そんな読み方があるんやあ……」と驚きの声も漏れていました。最後に「次も来たい」といつてくれた子どももいて安心した反面、次のプレッシャーです。自由な「ことばの海」へぜひ、飛び込みにきてください!ご連絡、お待ちしております!

【桔梗谷】



谷川俊太郎の詩「はなののののはな」や「さるさるう」などを、参加者それぞれに工夫を凝らして朗読。読み方の工夫で物語がより豊かになるのを実感しました。2回目は6月24日、3回目は7月29日です。

4/15 「大阪でアーツカウンシルをつくる会」の活動に協力

公民協働で芸術文化施策を検討・策定していくためには「アーツカウンシル」という仕組みが大阪に必要なと感じた有志が連続の勉強会と提言等をまとめていく会が発足しました。事務局には築港 ARC のスタッフも参加。表現活動の環境をよりよくしていく会の発足を記念してのフォーラムが應典院で開催。藤野一夫神戸大教授(芸術文化論)を招き、ドイツの文化政策の事例紹介をいただきました。今後も大阪で新たな仕組みを作り出そうと動き出したメンバーにより刺激となりました。



詳細は同会の blog に。
<http://osakaac.exblog.jp>

【朝田】

New Staff 「蛇谷りえ」

【じゃんに・りえ】



デザインを先攻に勉強してきた中で美術にも興味があり、おもしろいような情報を見つけては国内や海外の美術館・ギャラリーを回っていました。すると、ではここ関西のおもしろいような情報はどこにあるんだらうという疑問が出てきたところから、築港 ARC の話を聞き、ぜひ何か役に立てればと思えました。たくさんのおもしろい価値が生まれてきている中から、いかに確実に情報伝達するか。まだまだ力不足ですが、出来ることから着実にやっていきたいと思えます。

「ひと」と「場」の交差点……

應典院にしき

呼吸するお寺・應典院の、2月〜4月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

2月

- 2日・台湾から、建築関係者27名が来山。台湾の歴史ある寺院再建にともなう視察が目的。
- 10日・大阪社会福祉研修センターでの「第13回全国社協職員のごつご」の全体会パネルトークに主幹が出演。テーマは「変えていくこと変わらないこと」。
- 14日・築港ARCC月間会議。スタッフ全員がそろって貴重な場。
- 16日・第15回アーツと仕事研究会。ゲストは映像作家の坂下香さん。
- 18日・寺子屋トーク第48回「微笑みで開く（地域の看取り）」開催。参加者は120名を超える。
- 19日・高校演劇祭「ハイスクールフェスティバル2007」の第一回目実行委員会。当山にて開催。
- 22日・「上町台地100人のチカラ」トークサロンに就職と主幹が参加。玉造の「結」にて。ルームナンバー初日。
- 23日・「大阪アート・カレイドスコープ」南雲由子さん「ノックング・オン・ハプンズドア」展の設営開始。就職と事務局長は岐阜・多治見市立脇之島小学校での公開研究会に出席。

3月

- 24日・ルームナンバー千秋楽。
- 25日・「たんぼの家」主催「アクセスアーツフォーラム」開催。
- 26日・「大阪にアーツカウンシルを」準備打合せに主幹が参加。
- 27日・「大阪アート・カレイドスコープ」参加作家の平丸陽子さん展示作業。
- 28日・築港ARCCで「なにわと・築港ARCCスタッフオープンミートイング」が開催。テーマは「ここがオモシロい！大阪のオルタナティブスペース」。
- 1日・曹洞宗の関東青年会のみなさまが13人来山。葬儀サポートセンターの方々と就職が現代のお墓事情、ご葬儀事情について、意見交換。大阪・アート・カレイドスコープ展がスタート。「大阪・アート・カレイドスコープ」オープンセレモニーに就職と築港ARCCスタッフの小林瑠音が参加、綿業開館にて。「なにわ人形芝居フェスティバル」と「大阪春の陣」の決起集會に主幹と小僧インターンの日高明が参加。一心寺三千仏堂にて。
- 3日・関西の学生自主映画団体「関西シネック」上映会。
- 4日・大阪・アート・カレイドスコープ関連事業「道のある未知・光と影が歩く道」開催。
- 9日・第16回アーツと仕事研究会。ゲストは川中大輔さん。
- 11日・竹内敏晴ワークショップの発表公演。
- 13日・「space x drama2007」第一回制作者会議。
- 14日・應典院と創教出版合同送別会
- 15日・大塚郁子主催退任。最後の仕事は同日のいのちと出会う会。
- 16日・日本NPO学会のエクスカージョン「現地発表会」による来山者をお迎え。ユニットついで初日。

- 17日・築港ARCCにて、月例トークサロン企画「ARCCトークオンビレッション」がスタート。毎月第三土曜日（原則）に開催。
- 20日・春のお彼岸。樋口隆信西光寺住職を宮城県よりお招きする
- 21日・大阪・アート・カレイドスコープ展終了。
- 24日・ボンス・クラブ」開催。ザ・ブロードキャストショウ初日。
- 26日・塩根春華主催着任。
- 27日・第17回アーツと仕事研究会。ゲストはインディペンデントキュレーター雨森信さん。
- 30日・下寺町界隈のちよつとした名物となっている應典院の桜のライトアップ開始。
- 31日・「衣と食から探るサスティナブル・ライフ」の上映会とシンポジウム開催。主幹、登壇。

4月

- 1日・「上町台地・春の陣」参加企画「いのちのガイアログ」開催。小僧インターンの日高明くんが中心になって進められた企画。大阪城甲冑隊、来山。
- 2日・應典院本堂でパドマ幼稚園創教出版、應典院合同就任式。
- 3日・午前に就職からの年度当初所感。午後にはその年度当初所感に基づき、今年度の取り組み課題の整理。
- 4日・主幹より、應典院の年度計画及び目標の確認。夜には、白木原一仁氏によるパントマイムワークショップ「プロコブカラ」開催
- 5日・パドマ幼稚園入園式。「大阪でアーツカウンシルをつくる会」のイベント打合せに主幹が参加。築港ARCCにて。
- 7日・築港ARCC、月例スタッフミーティング。
- 10日・應典院、創教出版合同の歓迎会。特別ゲストとしてデザイナーの木村久夫氏をお招きする。桜のライトアップ終了。
- 14日・「出張！ARCC from 築港」開催。ARCCの普段の相談業務
- 17日・「space x drama2007」第二回制作者会議。広報戦略、Web、イベントの運営まで、幅広く議論が展開。
- 18日・雑誌「大阪春秋」の対談に主幹が招かれる。お相手は大阪市立大学の橋爪伸也先生。
- 21日・靈気楼サーカス初日。
- 22日・靈気楼サーカス千秋楽。
- 23日・「space x drama2007」共
- 24日・「ハイスクールフェスティバル2007」第二回実行委員会。
- 25日・築港ARCCで、大阪アーツアポリア・なにわととの合同公開ミーティング。テーマは相談されるひとのための相談ワークショップ」。平田オリザ氏と「Rance, pan伊藤拓氏が6月より開催予定の「若い演劇人のための基礎講座」打ち合わせのため来山。夜は、いわはしゆりさんの第18回アーツと仕事研究会。
- 27日・谷ハビックススターズ初日。
- 28日・「ハイスクール・ブレイクフェスティバル2007」第一回参加校会議に城田主務が参加。吹田、大阪アニメーションカレッジ専門学校にて。
- 29日・築港ARCCスタッフの桔梗谷光生による子ども対象の「漣ぎ出す表現ワークショップ」ことばの海とそよぎの空へ」venが開催。築港ARCCにて。谷ハビックススターズ千秋楽。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第67回 4月19日(木)

「死別経験を生かして」

話題提供者：田上 貞夫さん

(「大阪ひまわりの会」(遺族の会)運営委員)
奥さんを乳がんで亡くし、その後、認知症とな
った義母の想像を絶する介護、そして2人の若
いお嬢さんの世話。今は一人暮らしで人の助け
にとボランティア活動に精を出されています。

※第3木曜日18:30~20:30まで

参加費 寺町倶楽部会員700円(一般1,000円)

築港 ARC 月例トークサロン

ARC トークコンピレーション

関西でとりわけ先進的なプロジェク
ト、スペース運営を手がけるコーディネ
ーター、アーティスト、またはアートを用
いて多様な社会領域に関わる実践者を
ゲストに招いたトークサロンを実施して
います。是非お越しください!

○場所 築港 ARC (piaNPO・308号室)

○料金 1000円(資料・お茶代)

● #004 3月17日(土) 18:00~

「カフェの領域 ~異分野から実践する
カフェプロジェクト~」

若者の就労支援から始まり「新しい働き方
を提案する場所」として運営されている高
槻カフェ・コモンズ。主人自らが演劇人
であり、様々なジャンルのアーティストがイ
ベントを行ったり情報を交換する場所とな
っている谷町カフェバー・ポコペン。異
なる社会領域で活動する二人が、「カフェ」
という共通のアウトプットを実践している
背景について、お話を伺う。

ゲスト：福井哲也(カフェ・コモンズマ
ネージャー/日本スローワーク協会 理
事)・益山貴司(カフェバー・ポコペン
店主/劇団子供巨人 主宰)

子どものための自由表現ワークショップ

「漣ぎ出す表現ワークショップ “ことば”
の海とそうぞうの “空” へ」

ことばや身体を使った芸術体験をするこ
とによって、子どもたちが自由にいきい
きと表現することを身につけるためのワ
ークショップです。テーマは「朗読」。
さあ、色々な読みかたを試してみよう!

○7月29日(日) 14:00~17:00

○場所 piaNPO 二階コラボレーショ
ンルーム

○参加費 無料 ※別途資料代として500円

○定員 15名(先着順)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

《Thanks》

このたび株式会社銭辰堂様から應典院寺町倶楽部
の活動に対し、5万円のご寄付を頂戴いたしました。
謹んでお礼申し上げます

編集後記

初めまして、呼吸するお寺に参りました。私の持つ
お寺のイメージが、よい意味で払拭されている空
間ですが、人が集まってこそお寺が輝きを増すと考
えているので「大きな磁場」をスタッフみんなで作り上
げてゆきたいと思います。めまぐるしく過ぎゆく毎日
毎日に翻弄されないように、しっかりと生きて行くた
めに、頑張ります。(塩根)

今号でもご紹介してありますが、應典院舞台芸術祭
「space × drama2007」が7月からスタート。あい
だに、ハイスクールプレイフェスティバルもはさみな
ながら、約2ヶ月間におよぶ演劇の祭典です。是非、こ
の期間に、一度お立ち寄りいただいて、演劇の應典院
の本領を御覧いただけたらと思います。高校生から20
代前半の演劇人がそれぞれの魂の物語を紡ぎます。一
見の価値ありですね。(城田)

新スタッフも加わり、ようやく体制が整ってきた築
港 ARC。最近、各スタッフの個性や持ち味をすこ
く感じるようになりました。日常業務の些細な行動や
発言から漏れてくるその人となり。「ああ、この人はこ
ういう分野でこういう人達と付き合っていてこういう
嗜好性があるんだな」と感じるにつけ、どうすればその
個性を存分に発揮できるサポートをできるだろうか
と考えますし、同時に自分自身がスタッフから多大な
影響を受け、学ばせてもらっているということにも気
づかされるのです。(朝田)

初めまして、森山 博仁と申します。今回のサリュ
には関わっていないのですが編集後記を書かせて
頂いて大変恐縮です。今年の5月から應典院の劇場管
理として常勤させて頂いています。20歳から演劇を
やっていたので、公演をしている時の應典院しか知ら
なかったもので、働き出して、驚きと発見でした。これ
からも、應典院の色々な顔を見て、また新たな発見が
あるのでしょうか。とにかく、色々勉強していこうと
思います。(森山)

はこのサリュ 52号は大塚郁子さんの退職記念の
「卒業制作」です。お疲れさま、そしてありがとう
ございました。「エッ!？」と驚かれる方も多いのでは
ないでしょうか?新しい季節を新しい体制で迎えることと
なりますが、「大塚さんがいたときには…」と言われな

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.52

<次号 53号は…>

2007年8月発行予定

【特集】：アートなお寺とは?

~現代の美術・芸術を創造する場として~

1997年4月に落慶した應典
院。開かれたお寺を目指すため
に設立された應典院寺町倶楽
部。それらの活動を振り返りつ
つ、次の10年を展望する…。
紙面のリニューアルも含めて、
10年目の應典院ならびに應典院
寺町倶楽部にご期待ください。

■発行日
2007年6月30日

■発行人
秋田 光彦

■編集人
山口 洋典

■スタッフ
池野 亮光

朝田 亘

塩根 春華

城田 邦生

森山 博仁

■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

E-mail info@outenin.com

URL http://www.outenin.com

他人に教えるとおりに 自分で行なえ

他人に教えるとおりに
自分で行なえ

自分をよくととのえた人こそ
他人をととのええるであろう
自己は実に制し難い。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.52

Top Interview

人間とは何か。
根源的なものにふれるアートの世界

1

特集：アートとNPO
寺院空間発、創意と技の再創造。

4

「MONSIEUR MONSIEUR」
参加企画大全集

5

スタッフ座談会

10

「MONSIEUR MONSIEUR」に寄せて

14

「MONSIEUR MONSIEUR」参加
應典院おなじみ劇団紹介

16

アート情報誌の共有と連携のデザイン
築港ARCの展望

18

築港ARCスタッフ紹介

23

應典院解題

今生きている方の願いに
応えるお寺・應典院

24

「ひと」と「場」の交差点

30

應典院につき